

災害経験が地震被害に与える影響とその意味

日本女大家政

○伊村則子

石川孝重

目的 地震災害が住民と生活に及ぼす影響に注目してきた。同じ地域で発生した日本海中部地震、釧路沖地震、北海道南西沖地震、北海道東方沖地震において、同じような規模の地震であってもその被害規模は連続的な地震発生によって左右される。それらの分析の結果、被災地住民が体得した知見によって影響されている事実を見いだした。本報では兵庫県南部地震を考察に加え、住居を中心に地震経験が被害規模に及ぼす影響とその要因を探る。

方法 調査資料は本災害に関する新聞、テレビ番組、週刊誌、単行本、報告書などとし、住居を通した人間行動や意識的側面から分析し、兵庫県南部地震の現地調査もそれに加えた。

結果 地震を時間経過に沿って考察したところ、経験が活用されている内容には「情報」「行政対応」「被害」「避難」「火災保険」があった。さらに、経験は社会レベルから個人レベルに至るまでさまざまなレベルで蓄積され、その結果を活用し対策がとられる。宮城県沖地震のブロック塀の対策、日本海中部地震や北海道南西沖地震の津波対策、釧路沖地震や北海道東方沖地震への室内散乱の対策、兵庫県南部地震の大都市における直下型地震の対策、各地震の生活保証のための社会的対応などがその例であり、課題が山積している。次の災害の発生地域・時期・規模がわからない現段階では、経験から得た教訓を一つ一つ実行することが被害軽減のために大切であり、その実行は法改正を伴うものから個人レベルで実行するものまで多様であり、それぞれの立場で役割を果たす必要がある。また、経験の活用には伝承（教育・啓蒙など）する必要がある、それが社会運用されるようになれば経験則として意味をもつことになる。